

中国书画函授大学肇庆分校
肇庆分校建校二十周年纪念册

肇庆画苑

五月刊

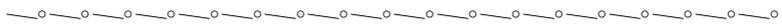
豊 田 都 峰
漣 響 集 その九

停 泊 の 檣 灯 お ぼ ろ の 芯 も や う
葦 焼 き し 日 よ り の 風 は 湖 に 棲 む
湖 の は ば そ の ま ま の 春 の 風
春 光 と な ら ん 湖 の 鳥 は 翔 つ
春 光 を ま き ち ら し ゐ る 湖 の 鳥
内 侍 塚 椿 の 一 花 の せ る ほ ど





春雨の靄となりゆく藪あたり
藪かげの一村こめて春の雨
逃水を追ひし日ぐれのわすれ雲
茎立にある日当りをよしとする
三本の茎立午下の翳まとふ
花虻のしばし地蔵の泣ぼくろ
ゆふかぜと思へるころの雪柳
さくら餅塔へ半丁ほどあたり



秀華採集

柏手の利き手をずらす立春大吉

鈴鹿 均

大きな柏手を打つための方法を分析して表現しているものも評価出来るが、字余りにしても「立春大吉」と下五に置いた構成はたいへん効果を上げている。

霜晴の踏んばりどころ太鼓橋

倉橋あつ子

道行の竹人形や雪明り

山田 和

まず両句とも季語のあしらいがよい。ために表現内容に良い響き、前句の「踏んばりどころ」に微妙なものを与えているし、後句には悲しみめくようなものを与えている。

鈴鹿 仁

亀鳴く

春の風名を成す橋のゆるき反り

澤の字の二池ありて花の嵯峨

亀鳴いて雲のあそびの雨こぼす

竹秋のこの地しかじか野風呂くる

一幅の草書のをしへ竹の秋

近 詠

和田 照海

牡蠣筏

牡蠣打女日がないち日灯して

牡蠣打女時には赤子振り返る

生實かご顎をゆるめて眠る牡蠣

牡蠣舟の戻る日溜り舟溜り

牡蠣筏より江田島の夜のとばり



神麓集

曲水 林 日圓

城南宮琴の音色に夏立ちぬ
 若葉風王朝装束身にまとひ
 鳥型の小舟流れる初夏の川
 曲水のほとりで和歌を青葉風
 ゆらめきて光をかへす夏椿

寒の入り 北村 香朗

今はただ寒九の水に祈るのみ
 再びを全身麻酔寒の水
 大寒に病み伏せるのみ伏せるのみ
 点滴は問遠となりて寒終るのみ
 老の春余命といふもの今少し

藤岡 紫水

情念や万両紅き東慶寺
 古井戸に薄紙のごと凍てし蝶
 月瘦せてかかる山の端別れ霜
 降るほどに蒼みゆく峯春の雪
 初午や彌宜の書ききたる正一位

胸の砂漠 松田都 青

春を待つわが心中の不発弾
 六日はや胸の砂漠の拡がりぬ
 次の世もこのままでよい寝正月
 血の溶ける音に耳借す雪病舎
 生涯を夢と思へば冬ぬくし

日供祭 禰寝 瓶史

雉一声拓地鎮めの碑裏より
 春みぞれ畑にざん悔の岩濡つ
 大姉の辺真珠の彩を保つ芽木
 供華の香やもぐら遁れし地虫出づ
 日供祭欠かさぬ背筋迎春花

船越 美喜

何処までも逃水を追ふ旅にして
 春雨に耳をすませる夕ごころ
 まづはとて佛に供ふさくら餅
 鳥帰る遠くに住める姉いもと
 茎立ちや親しき友と共に老ゆ



神麓集

春きざす

丹生をだまき

全身全霊読経朗々寒行僧
咳いて咳いて闇に覚めぬ夜を重ね
露留めて光る木となる猫柳
「早春譜」かつてのソプラノもう出ない
春きざす新調眼鏡よく見えて

春兆す

山田をがたま

寝る前の独りりハビリ余寒の灯
頬に迫る寒のもどりの夜明の気
通院日は寒のもどりとなる予報
リハビリの効果は徐々に春兆す
春いまだ寂寥へはまる日暮どき

五月の雲

竹貫示虹

むらさきは風を呼ぶ花五月来る
白妙の領布ふる富士や春のはて
草笛の御返らぬ白き雲
しらじらと明け鮎宿の蕎麥枕
丹波口驛にはじまる麥の秋

服部郁史

初日出不戦誓ひしこの山河
惚芽吹くうるむばかりの月置いて
二月やくやみの手紙ともう一通
正面に鷹の眼があり目を外す
茶の花や京想ふ日の和紙人形

風花通り

北川孝子

玉子酒むかし語りの息を継ぐ
寒晴れの眉やはらかき祈りかな
氣息満つ無口同志の寒稽古
吸ふよりは吐く息ながき霜日和
横顔の似合ふ風花通りかな

春の雪

柴田朱美

哭きにゆく裏階段の春の雪
鍵穴を夢が出てゆく春の雪
遊楽のふるへる仏間春の雪
春の雪白紙に戻したきことひとつ
春の雪奈落の闇を宥めたり



神麓集

花夢幻

伊藤 希 眸

親も子も夢中春雪庭うづめ
抽出しにビー玉いくつ夢違ひ
ごろ寝して夢想の春に迷ひ込む
若鮎にすうつうと夢魔の針降りる
D 51 の黒く山ゆく花夢幻

髪飾り

丸井 巴 水

冬眠の蛇のひもじさ内視鏡のむ
やなぎの芽触るるは妣の髪飾り
介護車のゆく冬萌の曲がり坂
土筆伸ぶ職種は無職しか書けず
空瓶を提げ振り向かば散るさくら

寒もどり

荻野 千枝

鶯は川に吾橋渡る寒もどり
冴返る石廊高慢なる聲音
葉脈のやうな血脈凍て返る
あやふさの卵の罅や冴返る
先師句碑永久に声なく寒もどり

雪万両

松本 鷹 根

戸を繰りて雪万両の出会ひあり
凍てし野の雲の白さの浮きごころ
寒水面茫と生きよと絹の波
淡雪に黄金飾りの神廂
春きざす森の切株陽の貌に

万華鏡

川崎光一郎

万華鏡回せばパツと春模様
風に乗るジャズ早春のネオン街
出不精な齡となりし余寒かな
町内の国旗疎らや建国日
春風や色紙に托すこころざし

岡本美子さんを偲び

小堀 寛

美しきひと掌翻す冬銀河
赤児生る卑弥呼と名づく龍の玉
御民われ引き砂のごと春汀
妻の留守徳利ねむし春の雪
冬館オフエーリヤの老後かな



京鹿子集

豊田都峰選

柏手の利き手をずらす立春大吉

京都 鈴鹿 均

京都 山田 和

足掻くほど踏めぬ逃げ足二月かな

道行の竹人形や雪明り
利き猪口の底の青き目春どなり

寒牡丹気ままな風の腑に落ちる

木枯や酒倉の窓昼灯す

釣書に余白の多し黄水仙

三代の机の光沢筆始め

金棒の一つは許す厄落

垣繕ふ十三回忌の風の音

霜晴の踏んばりどころ太鼓橋

草津 倉橋あつ子

五ノチ 伊吹 之博

煮凝や頑固もいまは好好爺

手品師の種のまる見え笑ひ初め

ぼつぼつと佳き知らせあり寒の明け
アリゾナの春夕焼け見て白衣脱ぐ

海鳴りの夜を徹して深雪晴

オフィスには家族の写真スリートピー

寒燈の天へ天へと街更けず

立春のたより訳して友増えし

枯芝の土手の向うに白き富士

さま 神田 惣介

屠蘇の酔ひ電話を取れば朋の死去

三が日夫婦二人で恙無し

安着の孫の電話や雪催ひ

初詣歸路はいつもの裏小路

八掛は山吹色に女正月

句会の日朱色に記し初暦

大寒の底を歩いて富士仰ぐ

追羽根の音は何いろ空を舞ふ

冬青空泳ぎてビルの窓みがく

人日の縄文土偶みな豊か

春告げむ瀬戸の鱻の乙女めき

鎌倉や源氏の山のみな眠る

分け入りて母懐の芽吹き山

光陰の蘇りたる梅一輪

末枯れをゆく正眼の構へして

厚氷割るや波打つ五七五

泣けばいいのに霜柱ふみつづけ

干し柿に種いくつある姉妹

雑踏の電話の小声寒明ける

衰へたぶんだけ優し冬日和

うすらひが水に女のときを過ぎ

曖昧な男見てゐる野水仙

G線上の冬芽ひとり居なくなる

ほんとうの雪は違ふと街に生き

煮凝を食べて悪女になりすます

梅一輪咲いてはるかな疵癒す

冬満月ジエームステイーンは永久の人

からつばの花瓶のような冬の海

三人三様短日の洋食屋

はや三日唐へ赴任の子の背仰ぐ

母方の遺伝は眼受験の子

仕事初めちらりと覗くコンパクト

寒晴れの白砂煌めく御用邸

手延べ玻璃御座所に梅の香り立つ

言の葉に身の丈越せり猫柳

白魚のわれ来しゆゑに掬はるる

晴天のどこまでもわが庭の春

甘酒にひと息さそふ神の庭

青天を押し上げにけり今朝の春

芽桜の遠く近くに水の音

寒四郎首をすくめて通りやんせ

裸木の空へ放てり明日の夢

角ひとつ曲がれば海よ枇杷の花

佐々木紗知

布川 孝予

岡田 愛子

高野 春子

直江 裕子

伊藤 希眸

千葉 河内 桜人

戸田 中村江利子